

パンタライ  
*Πάντα Ρέει*  
Chiba University of Commerce  
Archives Newsletter  
R. Endo



「秘策を盡して」(昭和10年3月『巣鴨高等商業学校 卒業記念』)

1935(昭和10)年3月に制作された卒業アルバムには、軍事教練中の様子を写した写真が複数掲載されており、それらの下には「秘策を盡して」の文字が付された。銃をかまえる巣鴨高商生はそのうちの一枚で、他に配属将校と思われる人々と作戦会議をしているかに見える写真もある。教練教科要目には射撃や軍事講和、戦史、指揮法などがあった。

中学校および高等教育機関における軍事教練(学校教練)は1925(大正14)年より正規に導入され、現役将校が配属された。1935年当時の巣鴨高商配属将校は青柳三郎中佐(電信第1聯隊附、巣鴨高商服務)であった。青柳は1887(明治20)年3月生まれ、陸軍士官学校卒の工兵科の陸軍軍人で1932年より巣鴨高商に配属、1936年8月には工兵大佐となった。





## 野々村 一雄（1913-1998）

元千葉商科大学教授・経済学者

1913年名古屋生まれ。1932年4月大阪市立大阪商科大学予科修了、1935年3月同大学大学部卒業。成器商業学校教諭、台湾高雄州および高雄商工会議所嘱託、南満洲鉄道株式会社調査部職員などを経て、1949年6月より東京商科大学（現一橋大学）助教授に就任。1956年より同教授、1962年3月経済学博士（一橋大学）、1976年4月一橋大学を定年退官し名誉教授。1976年4月より千葉商科大学教授（社会主義経済論）、1977年4月より1983年3月に定年退職するまで図書館長をつとめた。1983年4月から1989年3月まで千葉商科大学大学院特任教授。著書に『ソヴェート経済の構造』（青木書店、1959年）『回想満鉄調査部』（勁草書房、1986年）など多数。

野々村一雄は昭和から平成まで活躍した著名な経済学者で、「ソヴェート経済」を専門とした研究で知られる。一橋大学教授時代の経験は『学者商売』（中央公論社、1960年）、その後の千葉商大への着任経緯や同大学で起きた出来事などを著書『学者商売その後』（新評論、1978年）に書き記しており、軽妙な筆致からはその温かい人柄もうかがわれるうえ、同著には千葉商大についての興味深い描写が多く散見される。なかでも「第三章 団塊の大学生とともに」は、ほぼ千葉商大での経験を描いたものである。「千葉商科大学へ就職することがきまったのは、一九七六年の二、三月ごろだったと思う。三月に大学から電話があったので、その時初めて大学へ行き、学長、理事長、事務局長に挨拶した」（『学者商売その後』70ページ）という文で始まる。この時

に面会した「学長」が、番場嘉一郎であった。後述するように、番場学長とともに野々村は図書館長として学園を牽引していくこととなった。

さて、同書には「大学のある、市川市国府台は、なかなかいい場所である。万葉の昔から真間の手児奈の伝説で有名な土地である。いま、ここを歩いてみても、緑の深い高台で、風雅な趣きをそなえている」（同71ページ）、「勤務は一週三回、持ち時間は、経済原論が三コマ、社会主義経済論が二コマ、全部で五コマがノルマであるということであった。現在では、経済原論が一コマへって、それに三年と四年のゼミナールが各一コマずつ加わって、全部で六コマを受け持っている」（同71-72ページ）と書かれており、同書は1978年の発行であるので、千葉商大3年目の所感となっている。

# 「野々村一雄」千葉商科大学を牽引した人々①

一教室当りの人数が少ないからである」（同78ページ）と述べており、大教室での講義が当たり前に行われる「私立大学の多くでは、教員は、たえずこういう苦勞をいられていると思う」（同78ページ）と、70年代の私立大学における授業の状況を憂いている。ちなみに、野々村はどうしても教室内の私語がやまなかったとき、一度だけわざと「腹を立てることにし」（同79ページ）、「五分ぐらい彼ら全体を叱りつけた」うえで退室したことがあった。ただ、この日の昼食はひどくまずく後味が悪かった。「その結論は、やっぱり僕がわかった」と思うようになる。「どんなに学生が私語をしようと、どんなにその音が耳にざわり、心をうごかさうとも、教師が授業を中止しては、教師の負けである。ある意味で、授業は教師と学生との真剣勝負である」（同79ページ）と考えたのである。授業を「中断し退場した」ことを野々村は「自己批

判」し、「二度と講義の中断をやるまい」と誓い、「質量的な工夫」を授業で行うことにした。「中断した授業」の翌週の講義は「順調に進んだ。むしろ順調すぎるほどであった」（同80ページ）という。

着任2年目の1977年4月に野々村は図書館長に着任した。大学定年退職となる1983年3月まで同職を兼務しているので、2年3期をつとめたことになる。図書館長といえば、大学に置いて学長に次ぐ重要なポストである。『千葉商科大学広報』第33号（1977年4月1日）の「人事」には「教学関係新役職員」として「図書館長 教授 野々村一雄」の名前が見られる。同年6月25日発行の第37号によれば、加えて「大学院設置準備委員会委員」「創立50周年記念事業実行委員」にも着任している。退職直前の1983年3月には「千葉商科大学附属図書館新築工事地鎮祭」を取り仕切っており、翌1984年10月31日に創

立50周年記念事業の一環として新図書館の竣工式が、1985年3月23日に新図書館落成披露祝賀会が実施された。この頃は特任教授としてこれらの行事を見守っていた。

図書館長としての日々はやはり「負担は大変」「帰宅も終電」（同114ページ）であったという。館内の会議、書店との話し合いや値引き交渉、「学内の根廻し」「学長の許可」（同114ページ）をとりつけるところまで請け負っており、大学院の設置にそなえた「大学院設置準備図書」（同112ページ）の購入計画も立てなければならなかった。日々図書館長室へ通い、膨大な予算を前にした書店との折衝、洋書と書比率の検討のうえで購入計画を立て、図書の選定をこなし、事務局長を通じて学長の許可を得る。野々村は一連の仕事をこなしつつ、同時期における図書館の発展と充実を果たしたのであった。

（浅沼薫奈）

### 【訂正とお詫び】

「記念誌編集だより」創刊号（発行日：2025年4月1日）の内容に誤りがありました。ご迷惑をおかけしたことをお詫びするとともに、下記の通り訂正をさせていただきます。

■訂正箇所 表紙解題（誤）「番場嘉一郎『学長ゼミ』」（正）「野々村一雄教授『授業風景』」

記念誌分科会一同



## 番場 嘉一郎（1909-1989）

元千葉商科大学学長・会計学者

千葉商科大学第四代学長。会計学を専門とした。番場学長のもと千葉商科大学は大学院を開設（1977年4月商学研究科商学専攻修士課程、1979年4月経済学研究科経済学専攻修士課程）、さらなる飛躍を果たした。番場は東京商科大学（現在の一橋大学）を卒業後、1934年よりダイヤモンド社記者として活躍する一方、1941年5月に巢鴨高等商業学校講師、1942年4月に同校教授となったが、1944年7月より横浜市立経済専門学校（現在の横浜市立大学）へと移籍するにあたり巢鴨高商を退職した。戦後は一橋大学教授、青山学院大学教授などを歴任、1962年に商学博士（一橋大学）。1975年4月より千葉商科大学学長に着任、1987年3月まで千葉短期大学長、学校法人千葉学園理事・評議員、大学院研究科委員長等を兼務した。

### ● 記念誌分科会のうごき ●

2024年度より記念誌分科会のもと、本格的に資料収集が開始されました。同窓生の皆様にご寄贈へのご協力を呼び掛けたところ、今年度に入って多くの貴重な資料のご寄贈をいただいております。上半期寄贈資料のうちの一部となりますが、ご紹介いたします。

1955（昭和30）年卒業生から、「千葉商科大学学生証（商学部第四学年）」「学業成績証明書」「校章（襟章）」などの寄贈をいただきました。寄贈資料には在学中、通学時に使用した「学割」なども含まれてお

り、これらは当時の学生生活をうかがい知ることができうえ、減多に目にすることができない貴重な資料となります。また、ネットオークションで本学関係資料を見つけて購入したものを寄贈いただくこともありました。なかでも巢鴨高商時代の卓球部「トロフィー」は本学関係者や卓球部OBたちも初めて目にするものでした。貴重な資料ですが現在は詳細がわかっておりませんので、もし何かご存じの方がいらっしゃいましたら情報提供いただけますと幸いです。そのほか、資料のご寄贈や状況のご提供などご協力を賜りますよう、引き続きどうぞよろしくお願い申し上げます。







最新東京男子学校案内

### 旧制期における進学案内書

戦前期の若者たちが進学する学校を選ぶ際、進学案内書は重要な情報源として用いられていた。特に地方から東京など都市部への進学を志す者にとって学校事情は未知なことが多く、各学校の所在地や特徴、受験科目、特典にいたるまで諸々の情報を受験生へ提供していたのが進学案内書であった。学校情報だけでなく、上京にあたっての心構えや注意、交通事情や通学方法まで親切に紹介する雑誌もあった。大正期を経て昭和に入る頃には高等教育機関への進学率も徐々に高まってきていたものの、東京進学は家計負担も大きく、地方における高等教育人材はまだ少なく大卒者と接する機会も限られていた。したがって多くの若者にとって東京事情を知るためには、東京の学校を卒業し赴任してきた教師から話を聞か、進学案内書や受験雑誌などが情報を得る貴重な手段だったわけである。

さて、1928(昭和3)年に創設された巣鴨高等商業学校も建学当初より多くの雑誌で紹介され、若者たちに門戸を開いていた。本稿では数多くあるそれら記事のうち、比較的详细な情報が記載された『最新東京男子学校案内』(芳進堂、昭和10年)および『標準東京男子学校案内』(春陽社、昭和18年)を取り上げて紹介してみよう。

### 最新東京男子学校案内

1935(昭和10)年に発行された『最新東京男子学校案内』には、大倉高等商業学校および高千穂高等商業学校にらんで巣鴨高等商業学校が紹介されている。当時の私立

### 資料紹介

## 浅沼 薫奈

千葉商科大学サイエンスアカデミー特別客員教授・遠藤隆吉研究所客員研究員

## 『最新東京男子学校案内』(昭和10年)と『標準東京男子学校案内』(昭和18年)

高商はこの3校のみであったため、「私立高商三羽鳥」と称されたという。なお、大倉高等商業学校(以下、大倉高商)は現在の東京経済大学の前身校に当たり、高千穂高等商業学校(以下、高千穂高商)は現在の高千穂大学の前身校にあたる。

大倉高商は1919(大正8)年創設であるが、系列校の大倉商業学校が1900(明治33)年に赤坂区葵町に開設されていることから、『最新東京男子学校案内』では「創設時期 明治三十三年」「所在地 東京市赤坂区葵町三」と紹介されている。一方、同誌で高千穂高商は「創設時期 明治四十五年」と記されているが、前身の高千穂学校の設立は1903(明治36)年であり、高千穂高商の開校は1914(大正3)年であった。また、「所在地 東京市杉並区大宮町一六七五」とあり、これは現在の高千穂大学と同地であるが、当時の高千穂高商は東京府豊多摩郡和田堀内村字大宮に置かれていた。

さて、巣鴨高商はこの2校にやや遅れて1928(昭和3)年に創設された。これ以前に系列校として巣鴨中学や巣鴨商業学校があったが、同誌には「創設時期 昭和三年」と記されている。さらに「所在地 東京市豊島区西巣鴨町二丁目二六〇三 王子電車巣鴨新田下車、電話大塚九三二」となっており、通常、巣鴨学園の所在地は「西巣鴨町二丁目」とのみ書かれることが多かったが、「西巣鴨町二丁目二六〇三」は巣鴨高商の所在地を指し、巣鴨中学および巣鴨商業学校は正確には「巣鴨町二丁目二六三九」であったので、前述の2校と比して巣鴨高商に関しては学校を区別しかなり正確に記載している。

私立高商3校について「特典」は「大倉高商に同じ」とされ、「卒業生は実業教員無試験検定を受くるの資格あり」とある。入学資格についても3校とも同じで、「中学校卒業者及同資格者」であった。ただし、学費には違いがあった。大倉高商は「入学検定料五圓、授業料一ヶ年八十八圓」、高千穂高商は「受験料五圓、入学金十圓、授業料一ヶ年百二十圓」であったのに対し、巣鴨高商は「受験料五圓、入学金五圓、授業料一ヶ年第一部は九十九圓、第二部は八十八圓」となっていた。入学金の有無や授業料の違いは生徒数、学校規模にも関係していたのだろう。大倉高商は「毎年募集数約二百名」、高千穂高商は「毎年約八十名」、巣鴨高商は「各部約百名」とあり、第一部(中間部)と第二部(夜間部)とをあわせて約200名としていたので、定員規模としては大倉高商と同程度であった。

そのほか、同誌における巣鴨高商に関する情報は次のよ

うである。「修業年限 三ヶ年(外に研究生二ヶ年以内)」 「選抜法 前年十二月下旬募集発表。毎年募集数約百名宛。出願期限は二月中旬より三月下旬迄。試験は四月上旬。英語、数学、国語及漢文、身体検査及口頭試問(商業出は数学の代りに商事要項と商業簿記)につきて行ふ」「校長 文学博士遠藤隆吉氏」。

### 標準東京男子学校案内

『標準東京男子学校案内』が刊行された1943(昭和18)年は、「高商」と称した最後の年となった。戦時下における軍部の圧力が強まるなか、商学系専門学校は経済専門学校などへの改称が進められ、巣鴨高商も1944(昭和19)年より巣鴨経済専門学校へと改称している。さて、『最新東京男子学校案内』発行から約8年を経て、巣鴨高商の変化を記事内容から確認してみよう。

所在地については同じであるが、「豊島区西巣鴨二丁目一六〇三番」とある。前述したように番地は記されないことが多かったが、記載される場合も当時の記録で「二六〇三」と「一六〇三」とが混在して見られた。ただし、これは「二六〇三」が正確だったと思われる。また、「省線大塚駅市電大塚終点下車」とあり、利用駅の案内も『最新東京男子学校案内』とは異なっている。電話は「大塚(86)三二九〇」と変更された。「創立年月」は「昭和三年二月八日認可せらる」とあり、「目的」は「本校は実業学校令及専門学校令に依り商業上必要なる高等の教育を施すを以て目的とす」とされた。

「入学資格」は、「一、中学校卒業者(卒業見込者) 二、専門学校入学者検定規定に依る試験検定合格者 三、専門学校入学者検定規定に依る一般専門学校入学者に対し無試験検定の指定を受けたる学校卒業者」とあり、『最新東京男子学校案内』に比べて詳しく記述されている。

「学部」は「一部(晝間)二部(夜間)」、「試験期日」は「四月三日(学科試験) 四月五日(口頭、身体検査)」とあり、以前のような「試験は四月上旬」などではなく入試日が明示されているので、このころには学年暦が定まってきたと考えられる。なお、「入学期 四月六日」とあり、試験全日程を終えた段階で合否判定が出され翌日には入学を迎えたことになる。ちなみに1940(昭和15)年度の入試記録によれば、志願者数は第一部674人、第二部165人であり、それぞれ入学者数は181人と121人であった。つまり同年の第一部入試倍率は約3.7倍、第二部は約1.6倍となる。あわせて800人を超える受験生の学科試験の答案をわずか3日で採点を行

い、口頭試問を経て合否発表を行っていたのが当時の入試だったのである。当時の「試験科目」は「中学出身 国史、英語、国語、代数」「商業出身 国史、英語、国語、簿記」であった。8年前にはなかった「国史」が筆頭で試験科目に加わったのは戦時下であったことが影響したものと考えられ、従前の数学は代数あるいは簿記と変更されている。

そのほか同誌によれば、学費は「一部月謝一ヶ月九圓一ヶ年九十九圓」となっており、第二部も含め8年前と同額であった。ただし「校友会費」として「一ヶ月一圓 一ヶ年十一圓」も徴集されるようになった。さらに「職員数 教授一七名 講師二一名 合計三八名」「生徒数 一部四八〇名 二部一六〇名」「卒業後の資格 一、中等教員無試験検定(英語、商業科、簿記科) 一、計理士 一、幹部候補生(但二部生はなし) 一、上級学校入学資格(東京商大、大阪神戸商大、東北九州帝大其の他私立大学)」との記載があり、これらの情報からは戦時下ではあるものの同校が徐々に発展していった様子がうかがわれるのである。



標準東京男子学校案内



# 原田嘉中理事長からお聞きした話

## 千葉商科大学元総務部長 伊藤 雅敏

(いとう・まさとし)略歴

1976年4月、学校法人千葉学園庶務課入局。その後、秘書室、企画調査室等を経て、1995年4月より秘書室長、2007年4月より総務部長。  
2010年3月定年退職後は、嘱託職員、契約職員として勤務し、現在に至る。

原田嘉中先生は昭和28年(1953年)、千葉商科大学商学部商学科を卒業し、その後新聞記者になった。このため、大学からは暫く離れた生活を送っていた。昭和37年、大学に戻ってくるように言われるが、新聞記者の仕事が楽しく、一度は断ったという。しかし、理事長だった森志久馬先生の具合が芳しくなかったことから同年、大学に戻り、理事長代理、理事長職務代行を経て、昭和42年1月に理事長職を継ぐことになった。

理事長職を引き継ぐに当たり、森先生から厳重に注意されたことが1つあった。それは、学校の資金を決して投機的なことに使ってはならないということだった。以来、原田先生は森先生のその教えを守り通した。他の大学では積極的に投機をしていたところもあり、周りから見ると原田先生の経営はモタモタしているように見えたかもしれない。だが、原田先生は「急がば回れ」だと、頑なに教えを守り通した。

原田先生が理事長になって最初に建てた建物は図書館だった。当時、建てたい建物は他にもあったが資金がなかった。しかし、図書館は教員の研究や学生の勉学に一番必要なものとして、他の建物に優先して建設した。

昭和25年に旧陸軍兵舎の払い下げを受けた本学の校舎は、それはそれは粗末なものだった。同じ敷地内に付属高等学校があり、当時は男女共学だったので女子生徒もたくさんいた。

問題はトイレ。旧兵舎のトイレをそのまま使用していたので、ドアの上部が少し空いていた。さすがに女子生徒がそのトイレを使うには抵抗があった。そのうち、大学に1号館が出来ると女子生徒はきれいな水洗トイレに殺到し、休憩時間の1号館は若い女子生徒の声が廊下に響き渡っていた。そんなこともあり、大学関係者からはうるさいという声が上がった。

それもあるって、付属高校校舎の移転先を探していたところ、市川市中国分に

丁度よい土地があったため交渉の末に購入、昭和40年6月に移転した。その敷地の隣に広いブドウ園があった。移転当時から、このブドウ園が手に入れたいと思ひ、何度も地主と交渉したが、原田先生が理事長の間は譲ってもらえなかった。近年、地主の代が変わり、交渉の結果、購入することが決まった。令和5年夏に広くなった敷地に斬新なデザインの新校舎が建設された。

国府台地区の旧陸軍兵舎の払い下げは、その土地の条件がよかったことから、戦災に遭った教育機関の間では何としても手に入れたい垂涎の土地だった。結果的に、千葉商科大学、和洋女子大学、日本医科大学が土地を分け合うことになり、和洋女子大学は松戸街道を挟んだ江戸川べりの土地を所有することになった。

国府台の土地を手に入れるに際しては様々な経緯があり、本学も当初予定していた土地より狭くなってしまった。終戦後、大陸からの引揚者が住むところがないということで、千葉県ではこの旧陸軍兵舎跡の一角に県営住宅を建てる計画が持ち上がり、その結果、弘法寺に面した土地が県に渡ってしまったためだ。

日本医科大学が千葉ニュータウンに移転するため、国府台の土地を手放すことになった。和洋女子大学も買収を考えていたようだが、日本医科大学が本学に優先的に譲渡してくれた。これは、本学にとって、その後の発展に繋がる大きなきっかけになった。また、当時、敷地の北側に厚生省が管理している土地があった。その一角に本学が所有している飛び地があり、テニスコートとして使用していたが、その後、大学近隣の土地とテニスコートを交換することにより飛び地は解消し、本学に隣接する土地が増え形状がよくなった。

原田先生が理事長になって間もない頃、正門に入ってすぐの校庭にあった松の木の頂にバケツを被せてある光景を見たという。どうやら学生の仕

業だったらしく、松が風雨に当たって腐らないように被せたとのことだった。松の木は結構な高さがあったので、一体どうやってバケツを被せたのか、当時不思議に思ったと、原田先生は語っていた。

また、5号館の建設も原田先生の忘れられない出来事だったという。第3代学長だった石井頼三先生が急逝し、原田先生が学長代理を兼務していたとき、5号館の建設が決まった。財政的には非常に厳しい中、少しでも多くの教室を確保するため南門近くに5階建の校舎を建てる予定だったが、近隣の団地から日照権を侵害されると反対運動が起こった。一部教員もこれに絡んで学内でも反対運動が起きた。結果的に日照権の問題はなかったのですが、近隣との関係を良好に保つ観点から5階を削り、その分、教室数確保のため地下1階を設けることになったため、建設費が高かった。また、教室の使い勝手が悪くなり、後々まで教員や学生に不便をかけたと、原田先生は後々まで申し訳なさそうに話していた。

平成7年(1995年)4月、日本社会の動静にも多大な影響を与えていた加藤寛先生を第6代学長として迎え、全国から注目を集めた。加藤先生を学長に迎えるにあたり、原田先生が出向いたところ、加藤先生から、「私を単なる飾りの学長として考えられているのか、それとも学長として千葉商科大学のために仕事をして欲しいのか、どちらなのかを教えてほしい」と質問されたという。原田先生は「もちろん、本学発展のためにお力添えを賜りたい」と答えたという。原田先生は、加藤先生を本学に迎えた日の教職員の期待に胸を膨らませた顔がその後も忘れることができなかった、と繰り返し話していた。

同窓生の河西静夫さんの話も原田先生はよくされていた。河西さんは、昭和7年3月、巢鴨高等商業学校を卒業され、帝国ホテルに就職。若い頃、ホテル内レストランの食器の洗い場を任さ



## 原田 嘉中

【略 歴】

1929年5月18日生まれ

1953年3月

千葉商科大学商学部商学科卒業

1953年4月～1962年4月

株式会社交通毎日新聞社東京支社編集部

1962年5月

学校法人千葉学園理事長代理

1966年12月

学校法人千葉学園理事、理事長職務代行

1967年1月～2019年5月

学校法人千葉学園理事長、学園長

2019年6月

学校法人千葉学園名誉理事長

2024年2月21日

永眠 (94歳)

れ、そこで食器をいかに綺麗に効率よく洗うかを研究したという。その創意工夫が認められて要職に就くようになり、最後は帝国ホテルの副社長まで昇り詰めた。

本学で昭和45年(1970年)11月29日に同窓会が創立された際、河西さんが初代会長に就任した。以来、平成12年(2000年)10月22日までの30年間、会長として同窓会の発展のため尽力された。その河西さんが帝国ホテルを退職されることになり、ある日、原田先生のところを訪ねて来たという。世間話の後ご用向きを聞くと、「実は、帝国ホテル退職にあたり、自分が保有している帝国ホテルの株券を全て千葉商科大学に寄付したい」というものだった。その株券の総額を聞いて原田先生は驚き、「そんな大金を戴くわけにはまいりません」と固辞したが、河西さんの意志は固く、「自分は子供もいないし、私と妻の旅立ちのためのお金の手元があれば十分なので、あとは本学学生のた

めに役立ててほしい」と話されたという。結局、すべてを寄付として頂くことになった。以来、原田先生は、夜、床に就く時は、河西さんお住まいの方角に足を向けて寝ることのないよう心掛けていたという。

令和元年(2019年)5月31日、原田先生は53年間務めてきた学校法人千葉学園理事長職を退任した。理事長を退任するに当たり、山梨にある河西さんのお墓を訪ねた。「改めて多大なご寄付を戴いたことにお礼を申し上げ、ようやく長年の肩の荷が下りた感じがした」と原田先生は語っていた。名誉理事長となった原田先生は令和6年(2024年)2月21日、静かに94歳の生涯を閉じられた。

■本稿は、伊藤氏が原田先生から聞き取りして、原田先生1人称のスタイルで記録された長文のものを、記念誌分科会で大幅に圧縮・再構成したものである。



## 編集後記

本号では、千葉商科大学の歴史を振り返り、野々村一雄教授の功績、原田嘉中名誉理事長の取り組みを紹介しました。資料紹介では、巣鴨高等商業学校時代の資料や進学案内書を通じて、教育の変遷を知ることができました。さらに、卒業生から寄贈された貴重な資料やデジタル化資料を確認することにより、これらが本学の歴史保存において重要であることを改めて感じました。本誌が100年の歩みを振り返り、未来への展望を描く一助となれば幸いです。次号もどうぞお楽しみに。

## 記念誌分科会 活動記録 (2025年4月～2025年9月)

|       |    |                                                |
|-------|----|------------------------------------------------|
| 2025年 | 4月 | 記念誌編集だより「パンタライ」創刊号発刊<br>1955年卒業生より寄贈資料受領       |
|       | 5月 | 2001年卒業生より寄贈資料受領                               |
|       | 6月 | 第8回記念誌分科会                                      |
|       | 7月 | 1992年卒業生より寄贈資料受領                               |
|       | 8月 | 1970年、1971年卒業生より寄贈資料受領<br>史料編纂室保管資料デジタル化データ受領  |
|       | 9月 | 1971年卒業生より寄贈資料受領<br>事務局より倉庫収蔵品を受領<br>第9回記念誌分科会 |

## 資料寄贈のお願い

本学の100年の歩みを振り返る上で、卒業生の皆様がお持ちの資料は重要な記録・手がかりとなります。お持ちの資料をご寄贈いただける方は、下記の申込み・問合せ先までご連絡ください。

**【至急】学生服を探しています。学内での企画展で使用予定です。**

**【情報・資料などの例】**

卒業証書、入学手続きの記録、大学から送られた書類、大学で使用した教科書やノート、日記、写真、研修旅行・ゼミナール合宿の記録、学生寮関係資料、部活動・サークル活動関係資料など

\*原本を寄贈ください。原則として返却はできません。

**【申込み・問合せ先】**

右の「お問い合わせフォーム」よりお問い合わせください。

\*お問い合わせの際は、資料の内容(名称・分量等)をお知らせください。

\*内容を確認の上、係よりご寄贈方法などについてご相談させていただきます。

(保管スペースの都合上、資料の受入れをお断りする場合もございます。ご了承ください。)

お問い合わせフォーム



スマートフォン用  
二次元コード



PC用  
二次元コード

## 千葉商科大学記念誌編集だより 第2号



## 【Πάντα रेई(パンタライ)の由来について】

古代ギリシア語の「Πάντα रेई(パンタライ)」は、ヘラクレイトスの言葉「万物は流転する」であり、生々示碑の最上部に掲げられている。「第一に万物は生々流転するがゆえに測り知ることは出来ないため万物を畏敬するべきであること、第二に人間も同様に測り知ることは出来ないため平等に扱うべきこと、第三に人間は生々発展することを希望しているのでそれを助けるべきこと」の三つを綱領とした遠藤隆吉の生々主義哲学を象徴する言葉である。編集だよりの表面に記されたこの文字は、生々示碑から拓本により写し取った遠藤自筆の文字である。

発行日:2025年10月1日

編集:千葉商科大学創立100周年記念事業実行委員会 記念誌分科会

印刷:(株)アド・プラネット

発行:学校法人千葉学園 千葉商科大学  
総務課史料編纂係

〒272-8512 千葉県市川市国府台1-3-1

TEL:047-373-9774(平日9:00-17:00)

創立100周年特設Webサイト URL:<https://www.cuc.ac.jp/100th/>



## 史料編纂室の資料デジタル化進捗報告

史料編纂室にて保管しているフィルム写真や卒業アルバム等の貴重な資料のデジタル化を、2024年12月より開始いたしました。これまでに多くの資料が無事デジタル化されております。今後も引き続き、貴重な資料の保存と活用を目的に、デジタル化作業を進めてまいります。また、本紙掲載記事および寄贈資料に関しまして、思い出や情報をお持ちの方は、ぜひご一報いただけますと幸いです。皆様のご協力とご支援を心よりお願い申し上げます。